知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

JULY 2020 7

コロナウイルスに立ち向かう

～今だからできること、これからのためにできること

コロナウイルスに立ち向かう

今だからできること、これからのためにできること

新型コロナウイルスが世界に出現しておよそ半年がすぎた。3月以降、私たちの生活も大きな我慢を強いられるとともに、意識の転換を迫られている。コロナ禍のピーク時、人々は何を考えどう行動したのか。各地の取り組みの一端をレポートする。

常滑市陶磁器会館のマスク招き猫

自粛期間が終わったら、行きたいお店が増えていた。

取材班が見たコロナの日々

誰も経験したことのない事態だった。新型コロナウイルスが我々の前に姿を現した1月の半ばには、誰もその後の深刻な状況を予測できていなかった。それが瞬く間に感染が拡大し、3月2日に学校の臨時休校に突入、4月10日に「愛知県緊急事態宣言」の発令、16日には国の緊急事態宣言の対象が全国に拡大され愛知県が「特定警戒都道府県」に指定、と出口の見えない不安な日々を送ることになった。

沈黙の中でゴールデンウイークを乗り越えると感染者数は著しく減少し、5月14日には国の緊急事態宣言も解除された。この記事を制作している5月末の時点では、徐々に日常が戻りつつある。とはいえ、感染拡大の第二波も懸念されており、私たちは恐る恐る歩んでいるような状態だ。本誌が発刊される6月下旬にどうなっているのか、正直なところ予想がつかない。

本誌の取材班も、取材を続けながらコロナで変化する知多半島南部の状況をつぶさに見てきた。常滑南部を巡り歩いた1月はまだ取り立てて危機感もなかったが、師崎に通い始めた2月の半ば頃からどことなく雰囲気も変わり始める。3月に入ると観光客の出足も鈍ってきた印象を抱くようになった。3月下旬に発行した4月号（50年目の新師崎）の扉ページに「春が訪れ、南知多の観光もいよいよ本格稼動する頃合いだ」と書いたものの、正直なところこのまま本格化しないのではないかと感じていた。

3月後半には春の祭礼やイベントの中止が相次いで決定され、華やいだ春の気分は完全に吹っ飛んでしまった。4月下旬発行の5月号（2020年の師崎案内）では「第2回師崎まち灯り海ホタル」の開催告知を載せるつもりだったのだが、校正段階で削除を余儀なくされた。

事態の深刻さを噛み締めたのは4月初頭である。6月号（島と半島を繋ぐもの）の取材で篠島、日間賀島に渡ったのだが、往復の乗船客が筆者とカメラマンを含めてどの便も五人程度しかいないという有様を目の当たりにしたのだ。行楽シーズンにも関わらず、これまで見たことのないような閑散とした島の風景は衝撃であった。その後、4月中旬には、両島の観光協会とも来島を控えるお願いを公式サイトやSNSで発信している。その一方で、ゴールデンウィーク前後には美浜、南知多方面へドライブに来る人が多かったようで、複雑な気分を抱いた地元の人も多かったことだろう。

今号は制作スケジュールの都合上、緊急事態宣言が発令されている中で取材を進めざるを得なかった。取材班も、現場へは最低限の人数で訪問し、取材時には対象者と距離を取って短時間で済ませ、インタビューの足りない分はメール等でやり取りする対策を講じた。なお、本誌発刊時には記載内容が変更になっている可能性もあるので御了承いただきたい。

テイクアウトで飲食店を応援

コロナ以後、これまでになかった様々な取り組みを民間の事業者が行うようになった。とりわけ話題になったのは飲食店によるテイクアウトだ。時短営業や休業を余儀なくされる中で、これまでテイクアウト対応をしていなかった店でも始めるようになった。新聞の地方版、タウン誌やフリーペーパー、テレビのローカルニュースなどでも頻繁に取り上げられており、CCNCでも何店かをニュースで紹介している。

テイクアウト提供店の情報を集約し、チラシやネットで告知するという取り組みも、主に自治体単位で行われている。本誌エリアの四市町では、とこなめ観光協会（おうちでとこめし）、常滑商工会議所（D&T（デリバリー&テイクアウト）常滑）、武豊町商工会・観光協会（武豊テイクアウト）、美浜町観光協会、美浜町商工会、南知多町観光協会が情報を発信している。このほか、常滑市商工観光課では市民向けに、市内の飲食店で使用できるプレミアム付き飲食券「買っトコ!!とこめし応援券」を枚数限定で抽選販売した。

テイクアウトに踏み切っても通常時の売り上げには及ばず、厳しい状況が続くことに変わりはないかもしれない。しかし、利点をあえて挙げるならば、それまでターゲットでなかった客層にも店の存在や味をアピールする機会になったのではないか。せっかくだからと知らない店のメニューを食べてみた人も多いはずだし、子供を持つ家庭でも重宝したことだろう。

そこには、通常ならばあまりテイクアウトのイメージがないような居酒屋なども名を連ねている。名鉄常滑駅の西にある「Eng-ish Pub」もそのひとつ。ここは、ヨーロッパや地元産の多彩なクラフトビールが味わえる店として地元では知られた人気店だ。店長の伊藤友一さんが「クラフトビールの文化をこの地域に広め、根付かせたい」との思いから平成18年（2006）にオープンし、料理にも定評がある。テイクアウトでも、店のコンセプトに沿ってビールに合うメニューを提供しており、ビールも一緒に購入していく利用者も多いとか。伊藤さんは「こんな機会なのでいつもとは違うことがしたいと思い、テイクアウト専用の新しいメニューを多く作りました」と話す。意欲的な飲食店にとっては、逆境も新たな挑戦の機会になっているようである。

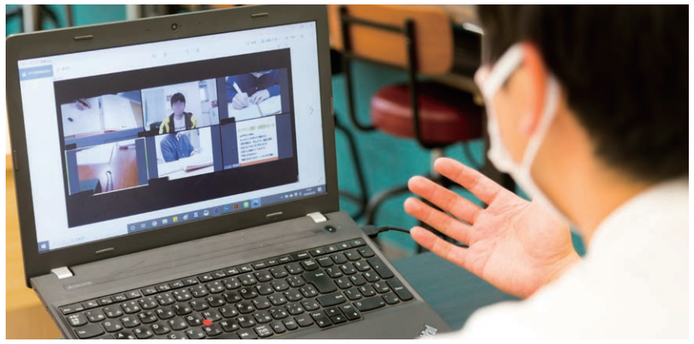
南知多町では、意外な場所に出店している店もある。そこは、国道247号の内海交差点の角。内海銘菓・波まく

らの製造元である櫻米軒（おうべいけん）の駐車場で、4月下旬から数店のキッチンカーや卵の移動販売車が営業している。

知多豚と南知多町産のねぎを使った〝南知多ネギホル〟をキッチンカーで提供する「よごべえ」は、毎週水曜日にここで出店している。通常はスポーツイベントやマルシェを主体に営業しているのだが、それらはすべて中止になってしまった。「どうしようかと困っていたところ、櫻米軒さんが駐車場を貸してくださったんです。豊浜でも、海苔店の吉原水産さんが場所を提供してくださいました。町内の皆さんもよく買いに来てくださいますし、今回のピンチは本当に地元に助けられています」と店主の相川知さんは感謝する。このような助け合いの精神が、きっと各地で発揮されているはずだ。

子供たちの学びを止めない

卒業式・終業式を目前に控えた3月2月からの突然の休校には、子供も保護者も教員も大いに困惑させられた。ネットでの授業動画の共有やオンライン学習も模索されるようになったが、家庭ごとのネット環境の差異や機器の貸し出しなどクリアすべき問題が多く、公立の学校での本格稼動はまだ難しそうである。



オンライン学習に関しては、やはり民間の事業者の方が先に進んでいる。平成30年（2018）に常滑市栄町に開校した「学習塾ことばこ常滑校」では、コロナ以前からオンラインを活用していたという。小学校高学年から高校生までが通うこの塾では、児童生徒が勉強する習慣を身に付けることに重点を置いており、従来型の塾のように生徒が講師の授業を一斉に聞くのではなく、それぞれの進度や目標に応じた自主学習を講師がサポートするというスタイルを取っている。

教室長の井上太貴さんに聞くと、コロナ以前のオンライン活用方法は、会議アプリZoomを使って、参加した生徒がお互いに勉強を教えあうというものだった。コロナ以降は、生徒が教室学習と自宅学習を選択できるようにし、教室では入室人数の制限と席の間隔を空けることでソーシャルディスタンスを保ち、自宅学習に切り替えた生徒はオンラインを利用。4月10日に愛知県緊急事態宣言が発令されて以降は、完全オンラインに移行した。ZoomとLINEを併用し、生徒がLINEで送信した課題を井上さんがペンツールで添削しながら、Zoomで対面指導するという形だ。

井上さんはこう話す。「教室での対面指導と距離感が違いますが、生徒たちは順応も早くて、コミュニケーションは全く問題ありません。家に一人でいるときの生徒がどのように学習に臨んでいるかも分かるので、指導の助けになっていますね」。また、オンライン学習をするにはスマートフォンのカメラアプリを常時作動させているので、勉強の手を休めてスマホをいじることもなく集中できる、という保護者からの声もあるとか。

オンラインによる教育はこれまで未知数の部分があったが、今回のことで利点が見えてきたということだろう。「オンライン学習は今後も継続しようと考えています。短時間でより充実した勉強ができるよう、オンライン用の学習教材づくりに取り組んでいきたいですね」と、井上さんは次の段階を見据えている。

勉強だけでなく、習い事にもオンラインは有効なようだ。書道家の澤田佳久さんが常滑・武豊・亀崎で教室を開いている「さつき書道会」では、3月からオンライン稽古を行っている。アナログな書道とデジタルなオンラインの結び付きはなかなかイメージしづらいが、どのようにしているのだろうか。

当初は稽古の時間をずらして、教室が密にならないように対処していた。オンラインの活用を始めたのは3月で、保護者から稽古の環境について相談を持ち掛けられたのがきっかけ。手本だけは教室まで保護者に取りに来てもらい、生徒は手本を元に自宅稽古に励む。書けたらLINEで送信し、それを澤田さんが添削するのだが、その際に自分の〝実演添削〟を動画で撮影し、それを返信している点がポイントだ。その動画は自分の目線から撮影しているので、生徒は半紙に向かう時と同じ感覚で視聴できるという。

子供たちのやる気を引き出すのが大人の役目だ。

澤田さんは次のように話す。「参加している生徒さんからは『先生の目線で見られるから、より分かりやすい』と好評です。教室では所作や稽古に臨む姿勢も含めて総合的に見ていますが、オンラインでは〝書く〟ことに特化されるので、筆の運びなど細かい点に気付くことができるようですし、何回も見て繰り返し稽古ができるのも利点ですね」。

この取り組みは保護者にも少なからず影響を与えているようで、動画を一緒に見たある生徒の母親からは「美しい文字を身に付けることがいかに難しいか自分にも理解できて、真剣に取り組んでいる子供を承認してあげられるようになった」との感想も届いているという。

長い休校で子供たちの生活リズムは乱れ、多くの保護者は大いに悩まされた。子供を指導する立場である井上さんや澤田さんは、子供の学ぶ意欲を持続させることを第一に、身に付けてきた習慣を途切れさせないためにどうすべきかを考え、「今だからできること」を実践してきた。それが保護者にとってはどれほど心強かったことだろう。一方、子供にとっては、単に勉強や書道を教わるだけでなく、危機に際しての大人の対応力、親身さ、本気度に気付く機会になったかもしれない。

高機能マスクを知多木綿で

今回のコロナでは何かとマスクが注目されたが、これからの生活には必携品になることは間違いないだろう。当然ながら我々も取材のときには必ず着用したし、取材した皆さんも着用していた。

マスク需要の急激な高まりを受け、コロナ以前からマスクを製造してきた知多半島の織布工場でも生産体制を増強させているという。その中で、武豊町冨貴にある東洋織布株式会社が興味深い取り組みに参加していると聞き、訪ねてみた。

東洋織布は昭和24年（1949）に創業した知多木綿の生地メーカー。知多半島全域に二十数社ある織布工場のうち、武豊町では現在ここが唯一である。紳士服の芯地、ジーパン生地、ソファー、自動車関連などオーダーに応じた多種多様な生地を手掛けているが、主力にしている製品のひとつが「濾過布（フィルター）」。知多木綿特有のきめ細かな織の技術を活かして、純度の高さが求められる醸造製品用として数年前に開発したものだ。酒や醤油など全国の醸造元から引き合いがあるだけでなく、掃除機や自動車用のフィルターとしても活用されているという。

その濾過布の特性はマスクにも有効なのではないかと、知多木綿のブランディングに取り組んでいる業界内のグループが着目した。「知多木綿マスク」はすでに製造販売されており、これまでは知多木綿の晒やガーゼだけで作られていたが、生地と生地の間に東洋織布製の濾過布を挟む構造にすれば、通気性を保ちつつも微粒子がより遮断できるのではないかというのだ。

東洋織布ではマスク用の生地の製造はしていないが、このグループのメンバーでもあり、開発に参加することになった。代表取締役の永田高明さんは「当社の濾過布を様々な工業分野に転用するアイデアはあったのですが、マスクに使おうという発想はありませんでした。用途が広がり、より多くの人の役に立つのであれば嬉しいですね」と話す。取材時にはまだ試作の段階だったが、近いうちに製品化できそうとのこと。

知多木綿ブランドを標榜する身近な商品はまだ多いとは言えず、高品質で需要も高い割に存在感を放っているとは言い切れない。価格が手頃で生活必需品であるこの新しいマスクが、知多木綿の認知度アップの契機になるかもしれない。

〈取材協力〉English Pub／有限会社櫻米軒／よごべぇ／学習塾ことばこ常滑校／さつき書道会／東洋織布株式会社／みんなの縁がわ／各市町観光協会・商工会